

## 「クリスマスの意味」(コリントⅡ、一章一五〜二二節)

### 1 クリスマス

四本目の蝋燭がとまり、今週末、二五日に、クリスマス(降誕節)を迎えます。今日、私どもは、クリスマス礼拝をささげます。

私どもの教会の年表を見ていましたら、一九二二(大正一一)年の項に、第一回日曜学校合同クリスマス会(石切町佐藤運吉宅)とありました。これは教会の公式の創立四年前のことです。そこからすでにほぼ百年です。いま感謝と共に、畏れと責任の思いを深くするものです。

今年のクリスマスを、私ども、それぞれのようないい思いで、迎えておられるでしょうか。クリスマスは、私どもが自分の歩みを振り返ってみる、定点といいますが、ある意味の基準点にもなります。日本であれ、外国であれ、あの日見たクリスマス・ツリー、あのとき参加したクリスマス礼拝とか、もちろんその多くが、忘却の彼方に消えてしまい、記憶に残っていないかも知れません。しかし確かなことは、そのような時を何度もへてきていることです。

今日のこと、そのようなクリスマスの一つになるのでしょうか、そうしてクリスマスと私どもがクロス「交差」した、クリスマスが私どもの人生を横切って行った、何回もくり返し、横切って行った、そのことは確かなことです。つまり、まさにそのようにして神が、私どもに近づき、私どもに呼びかけ、私どもに出会ってくださったのです。

今年のクリスマスを、私どもがどのように迎えるか、それももちろん大切なことですが、どのような時代の中で、これを私どもが迎えようとしているか、それを考えることも同じく大切なことです。

昨年、そして今年と、私どもは、否応なしにコロナ禍のことを考えないわけにはいきませんでした。まだ終わっていません。これによって、私どもの生活が、危うくされています。生活の経済的な基盤が脅かされている人、健康への不安とおそれが、これまで以上に、大きくなっている人。教会もそうです。礼拝の中止や、活動の制限など、早く終わって欲しいと願っています。そうした中で私どもは、クリスマスを迎えています。こうした中で私どもはどのように聖書のメッセージを聞き、そして伝えればよいのでしょうか。

さて今日、私どもに示された聖書は、コリントの信徒への手紙二の言葉です。この箇所我真ん中あたりにこういう言葉があります。

神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となった・・・(二〇節)。

「この方において」の「この方」とは、イエス・キリストです。「然り」というのは、英語のイエス、ノーのイエスでしょうけれど、簡単にいえば、実現したという意味です。神は約束したことを実現した、現実のものとした、ということです。手紙を

書いた使徒パウロは、御子イエスの誕生を、この方において、神の約束が実現したことを理解しているのです。そしてそこに、聖書の神の忠実さ、真実さが示されていると受けとめたのです。

## 2 神の恵みの下で

この神の忠実さ、真実さに、パウロが改めて思い至ったのは、どのようにしてであったのでしょうか。

このような確信に支えられて、わたしは、あなたがたがもう一度恵みを受けるようにと、まずあなたがたのところへ行く計画を立てました。そして、そちらを経由してマケドニア州に赴き、マケドニア州から再びそちらに戻って、ユダヤへ送り出してもらおうと考えたのでした。このような計画を立てたのは、軽はずみだったでしょうか。それとも、わたしが計画するのは、人間的な考えによることで、わたしにとって「然り、然り」が同時に「否、否」となるのでしょうか。神は真実な方です。だから、あなたがたに向けたわたしたちの言葉は、「然り」であると同時に「否」というものではありません」（一五―一八節）。

これだけでは、少し分かりにくいと思います。前後関係をふくめて説明すれば、こうです。

コリントは、ギリシャの南部アカヤ州にある大きな港町です。そこにはじめて伝道し、教会を建てたのはパウロでした。しかしこの教会は問題のない教会ではありませんでした。それもあってパウロは何年かぶりで訪問する計画を立てたのです。その具体的なルートも書いてあります。

しかしこの計画は、じつは、いろいろの事情で実現しなかったのです。そのことを理由に、パウロを日頃から快く思っていなかった人たちが、彼が言うことは、イエスなのか、ノーなのか、分からない。行くと行って来ない。イエスと言いながら結局はノーだし、ノーと言いながらイエスだ、軽率だ、移り気だ、言っていることが信用できない、そういう非難の声があがったのです。

これに答えているのが、今日の聖書の言葉です。パウロは、私の計画は「人間的な考え」によるのではない。むしろ、いつも、神から与えられた「純真と誠実」をもって、神の恵みのもとに、神に導かれて計画を立て、行動している（一二節）と弁明しています。

その上で、「神は真実な方」であって、その神の導きにより、コリントの教会に伝えた言葉は、どんな言葉も同時にイエスであったり、ノーであったりするものではない。なるほどいろいろの事情で、計画通り、伝えた通りにならず、計画変更を余儀なくされたこともあるけれど、しかし私たちの言葉は神から出た真実の言葉であり、イエスとノーが一緒になったようなものではない。これが、パウロがここで書いていることの意味です。簡単にいえば、計画を変えたからといって、不真実がそこに入り込んでいないわけではない、神の真実がそれを保証する、神の真実という土台に基づく私

の言葉も真実なのだということです。

しかし彼は、そのように書きながらも、人間の計画、人間の約束、一人の人間の決断とか決心とかいうようなものが、どんなにあやふやなものか認めざるをえないと思わないわけにはいかなかったのではないかと思えます。計画も、自分の決心も、人間的な思いによるものでなかったといえ、計画を、そのように変更せざるをえなかったのは事実だからです。そこには、自分の計画にしても、約束や決断にしても、たとえ神の真実によるものとはいえ、真実なものでないことを疑わせる余地が、あることになるのではないのでしょうか。

### 3 神の然りと人間の然り

おそらく、そうした思いがあつて、パウロは、ここで、神ご自身の言葉の真実というものに思いを致さざるをえなかったように思うのです。そこでパウロはつづけてこう書いています。

わたしたち、つまり、わたしとシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えられた神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては、「然り」だけが実現したのです。神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます（一九〜二〇節）。

神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となった、これがこの箇所を中心となる言葉です。

神の約束とは、人間に対する神の救いの約束です。神の約束は、神の民イスラエルのそもそもの始まりまで遡ります。

アブラハムのことを思い起こしていただきたいと思います。神はアブラハムを選んで、その子孫を祝福し、彼らを通して世界を祝福し、救うという約束を与えられたのです（使徒七・五、一七）。

しかしその救いの基となるべきイスラエルの歩みは、到底それを期待していいような歩みではありませんでした。詳しくは申しませんが、約束は潰えた、反故にされたと見える歴史を彼らは刻まざるをえなかったのです。けれども、まさに神はほむべきかな！ 神の救いの約束は、その真実のゆえに貫かれ、いまイエス・キリストにおいて実現したのです（ローマ一五・八〜九節）。

神は、ご自身に忠実な方、真実な方です。神の約束は、神の言葉は、神の子イエスにおいて果たされた、実現した、成就した、救いの約束は、取り消されることはなかったのです。

これが、使徒パウロをはじめとする初代のキリスト教徒たちの、御子イエス・キリストの、すなわち、クリスマスの受けとめ、理解です。神は私どもを見捨てず、憐れんでくださった、神はその約束を果たし、実現した、その確かな証し、それが、イエス・キリストです。

いまこの事実を前にしたとき、私どもは、これをアーメンと言って、神をたたえざるをえないとパウロはいうのです。アーメンとは、然り、真実という意味です。神の然り、神の真実に対する人間の然り、賛美です。

しかし同時に私は、こう思います。このアーメンは、たんに長い歴史を貫いて神が御心を実現したという過去のことに対するアーメンであるだけではない、未来へのアーメンも含んでいると。

私どもの人生も、この世の未来も、まだ具体的な姿において、私どもに見通すことはできません。しかし、不透明な未来についても、私どもは、もしイエスの誕生に神の真実を見ることができるとすれば、神の真実を確信し、それを告白していいのだと思うのです。この未来へのアーメンも、ここでのアーメンには含まれていると言わざるをえません。

それに関連して、いま改めて、ヴィクトール・フランクル (1905-97) の言葉を思い出しています。彼は、ご承知のように、ナチスの強制収容所、アウシュヴィッツを体験した精神科医です。『夜と霧』や『それでも人生にイエスという』という本などで有名です。

地獄のような収容所の生活の中で経験したことを彼は、解放後に、精神科医として分析し記述します。それによると、命とか人生の意味とかを問題にするとき、人は通常自分の側から人生をながめ、視点の中心に自分をおいて、「われわれは人生から何を期待できるか」と問います。しかし強制収容所のようなところでは、そういう見方では耐えることができない。なぜならそこには、何もないからです。そしてそういう思いでいた人たちは、未来を失い、抛り所を失い、内的に崩壊し、たとえ頑強な体の持ち主でも、身体的にも心理的にも転落し、やがて次々に仆(たお)れて行ったというのです。

フランクルによれば、この人生観は「人生は何をわれわれから期待しているか」というものに変えられていかなければならないというのです。そうして生き延びた人の例を彼は挙げています。詳しいことは、今日は申し上げられませんが、『夜と霧』から一つ上げれば、一人の科学者の例です。彼の仕事が彼を待っていた。自分の書いていた本がまだ完成していない。その完成が彼を待っていて、彼は自殺企図を免れ、生きのびたのです。

フランクルの観察の通りです。私ども、強制収容所の中にいるわけではありませんが、限られた時間を生きていることは確かです。自分の可能性は毎になくなっていきます。私どもは、死に向かう存在です。その観点からすれば、「われわれは人生から何を期待できるか」という問いは、遅かれ早かれ、意味を失います。人生は、私から、私たちから、何を期待しているのか。あるいは、神は、私から、私たちから何を期待しているのかと、問いを変える必要があるのです。それでも、私どもから、私どもの未来について、不安がなくなるわけではありません。しかしそのときこそ、私どもはクリスマスを思い起こすべきです。神は真実な方です。約束を、語られたことを実現する方です。そうであれば、私どもの未来についても、私どもはアーメンと唱えながら歩むことが許されるのではないのでしょうか。

(二月一九日)